

藤田さんのこと

福 谷 茂

藤田さんが文学部を去られることになったとき、なんとも寂しい気がしたのは私だけではないだろう。ある意味で藤田さんが文学部の伝統をよく体現しておられるのこりすくない方だと感じていたからである。

私が藤田さんとはじめて会ったのは院生時代の授業の場ではないかと思う。しかし本格的に存じ上げるようになったのはやはり同僚となってからである。誰しも同じように感じているのではないかと思うが、同僚としてみた藤田さんはあくまで端整で静かな方だった。実は私は教授会では毎回藤田さんの後姿を拝するという位置関係だった。というのも、藤田さんが座っておられる場所が思想文化学系のグループではなく東洋文献文化学系のかたがたのなかに混じっておられたからである。視線が学部長席に向くのを求心的とするなら、藤田さんは遠心的というか、外側をむいて座られていたわけだ。私は後ろ側からという好位置？からじつと観察していたのだが、ともすればありがちなように、会議中にまわりとがやがやと雑談したり私語を交わしたり、「内職」をするということは藤田さんの場合たえて見かけなかった。藤田さんのこの位置は私が着任したときにはすでにそうなっていたようなので、なぜそうなったのか、ほんとうの理由はわからない。あえて孤高を選ばれたのかもしれないし、そんなに深い意味はないのかもしれない。なにしろ藤田さんの風貌姿勢という点ではすくなくとも私にとつてはたいへん印象的なことである。いま遠心

的と書いてしまったが、視線が外を向いていることはかならずしも注意力が求心的でなかったということを意味しない。というのは、教授会に限らずいろいろな会議などでも議論の方向が変になりかけたり、緩みが出かけたとき、あるいはどこか不審な点があるときには、ひとこと釘を刺すような発言をされている藤田さんを目撃したからである。こういうときには、伝統的な文学部あるいは「哲学科」の人というものはみなさんこういうスタンスがとれたのだろう、とその昔を偲んでしまったものである。

藤田さんは酒はまったく飲まれない。いろいろなパーティの場でもバヤリース？で乾杯しておられた。どこでも自分のペースをはずされたことはないし、乱れた藤田さんを見たことはない。どんな席でもみなさんと談笑しておられた。芯に厳しいものを秘めつつ、それを売りものにしたり他に強いることがない生き方をうらやましく感じる人は多いだろう。とはいえ、これは同僚として、「完成形」の藤田さんと接することができたものの見方かもしれない。学生時代の藤田さんを知る方の回想をうかがいたいところである。

京大では日本哲学史という研究室を創設され、膨大な業績を上げられたことをなによりめでたく思う。日本哲学史という学問分野が制度化されて定着したのは研究室や日本哲学史フォーラム、西田哲学会などさまざまな場における藤田さんの尽力によるところが大きいことは誰もが感じていることである。そしてこの学問分野としての制度化ということの恩恵をこうむっているものもきわめて多いことはいうまでもない。私もその一人であることを思い返して、あらためて藤田さんへの感謝の気持ちを強める次第である。私たちが学生だったところに、西田や田邊に関して論文を書く資格がある、と周りが認めるのは直弟子の方々に限られていた。そのころの言い方という、「寸心会」や「田邊先生記念会」に毎回登場されるものもほぼ直弟子の先生方に限られていたし、京大にいる以上そうした機会に接するとは多いという意味では身近なもの、自分の勉強や研究とは別の世界という扱いをするのが私に限らず普通であつ

たのではないだろうか。直弟子の方々は「西田先生」「田邊先生」という言葉遣いをされていたし、その語法を採ることができない、あるいは採りたくない、私たちは傍観しているほかなかったのである。

ところがいまや「西田が」、「田邊が」、とだれでもが口にしている。これは世代が代わって、西田幾多郎や田邊元を歴史的存在として取り扱える時代を迎えたということももちろんあるが、私にとつては藤田さんのおかげである。なにごともイニシャル・レジスタンスということがある。誰かが口火を切ってくれるのを必要とするのは人情であろう。その資格を持つ藤田さんがその位置に立ちその義務を模範的にはたされたことは後輩にとつてまことにありがたいことだった。

藤田さんのお仕事ぶりに感じられるのは芸術家風のむら気ではなく、職人肌の実直さである。藤田さんの書かれる文章や、西田全集や岩波文庫での注釈作業にもそれはよく現われているように思う。的確簡潔であつて余計なところがない。しかも通り一遍には流れていない。論文や著書を書こうというときには気負いすぎてデフォルメへの誘惑に屈しそうになるものだと思うが、藤田さんの場合はたとえば岩波新書の『西田幾多郎』がそうであるように、正統的なスタイルを貫いて崩れることがない。正面からの西田像が描き出され、誰にとつても必要不可欠な知識が盛り込まれている。これはきわめて強固な意志を必要とすることであると思う。

藤田さんの印象をこのように整理してみると、藤田さんはヘーゲル研究者であるが、どうもお仕事ぶりは、あるいは人生においては、カルテシアンでいらつしやるのではないか、ということに気がついた。デカルトの暫定道徳は「行動において、できるかぎりしつかりした、またきつぱりした態度をとること」、「どこかの森に迷い込んだ旅人たちは、あちらに向かったり、こちらに向かったりして迷い歩くべきではなく、いわんやまた一つの場所にとどまっているべきでもなく、常に同じ方向に、できるかぎりまっすぐに歩むべき」（野田又夫訳）と教えている。「しつかり」「きつぱり」

「まっすぐに」というあたり藤田さんを形容するのに使えそうな気がする。

「いつかお話をしたときに今後考えておられるいろいろな著述の予定を伺ったことがある。予定というより、「常に同じ方向に」歩んでゆく藤田さんによつて次々と実現されてゆくことと感じている。ますますのご健康をお祈りする次第である。